



^ 13
3332
2



門へ13
3332
2

長柄 繪本黄鳥墳卷之二

遠州日阪驛

栗杖亭鬼卯著

大正十年八月廿
本大學出版部贈

佐々木家騒動話

史記曰明君知臣明父知子誠者我佐木源太左衛門長臣也
原作左門を厚く用ひたれど松原も忠臣無二の者ありし今
宵不汁曲者いり遊し主の身の土氣つるく明て候てら
し見ては鮮血ほど交りて成り事切見えたり
一度と仰天一一度かゝるも命抱し物身
途方なき涙をぬぐひ情考ふ宵に隣る佐木源太
左門恥辱を得るかへ意恨いやく殺害せしむ
束さく鏡櫃より事疾しとゆ打見やまば櫃も打倒し



つうに具足も散乱し々々金も何や尋ねる一色も何
がれ扱ひ宵に金のり所を見置る主人を害し金も集い
立退しハ武士も似合ざる人非人と齒を喰志ざりかすもせん
とくもひき夜明を待てる主人の亡骸と快林寺にて寺に收めは
下部を召連引返して殺か事もち河内へまゝ東へ
着ろらん秋葉江の島を廻る一日二日の延引り事も
あらんぞ諸の方源之助りも指折かろ居る所へ松原作九
五門をなくと立入りあつくのう落もろ物語まへ親子の驚
きいさうろ家内一同は嗚呼と叫ぶとさあはてぞあけ
作五門涙を押し拭い永身も島田かく殿の供やさんなれ
とも此事ついでに告はつくと人々も頼押ぬいおろく

アツいハ暇ありと腕指抜よりとや九その腕つき立たり
渚も源之助も大お救は汝血迷へるあつろ女も源之助いさ
少此家め何して守立なきや叔くもまりし事いせと歎る
しあがれ其事も心附ぬもろはれもと此起りい某錠は打
碎きようろなま罪人と此作五門なり殊に大和においと叔父源吉
どの某を深く憎むる某生くろんほは親子を謀て以て
害しろろ事必定まり某うたと聞ろろ女子といひ幼少の若旦那
まで事のろるべきと心なゆハ親子に害するべし只此後
ハ源吉のに随ひ生れま門よりとま令りてこそ大旦那の秋
も討えと懐より割筭の片取出し是ハ彼曲物家小打り
手裡にあり是とまろに佐木源太五門と名乗るものろ討

長臣松原作左門
主人横死と
源之助母子の
告て行とま
とより絶と



作左門



源之助

父君の修羅の忘執を晴しえ志ざり源吾どのに此は屋鋪は
 渡しは親子の居所を遠く移しえは一緒おぼさる必大なる災に
 達すべし我弟作内よりよめ武士と嫌ひ如賀の町家おぼし
 られば敵の手がらももろりり作内と頼むに北国へ下りて
 と言終て切先を咽へ突立らつぎみ成り死々々を哀るり親
 子の重なる歎きに只伏況ておぼし今ハせんうろく作内門
 を取斤付南都五条より佐木が上官石川大膳といひある人の元
 へ訴へ且叔父源吾ももろくと志せむ終此叔父なる源吾といふ者
 と源太左五郎が別腹の弟さう心俵まで倭悪めして放蕩不頼の
 縁だらけ人さうさる源太左五郎さう教ふぬまど聞合をゆけ
 る河松原作左五郎さう勤當り多と志きりい勤られと流るる

の名われが五条の石川大膳を頼むて食客とて置くるさる
 して源吾作左五郎を憎し事甚し此石川大膳といふ近衛院
 の御宇鶴を射さるるは辞して河内へ籠居してゆりたる石川
 次良左五郎が後胤ありさういつの頃より北条の旗下となり當時
 宗尊親王おぼり移り勢強大と成終お親王の謀叛ふたり民
 と志しけ大悪不道の曲者さるる類をりて集る護のぞく源吾
 を二ツりめめのと寵愛しえもさる源吾も大膳よがり移りるの
 らひ暮したるが河内よりの注進と聞くと大膳源吾に言はる
 我汝と河内の郡司おぼさる心をつらめし手をも濡るは我
 意は遂より汝も我は續く河内へ来るべし馬引寄てお
 けは源吾も跡より引添る急ぐる

佐々木源之助親子丸児とある話

石川大膳ハ豹公早免々鳴野の里へ来て親子の者とよび出
 言渡しつたは佐々木源太左門武士とて周討する其上方と
 も抜合さば未練の振廻其外ふりて源之助親子の者門前う
 追拂ふ一尤家督ハ源太左門弟源吾も下さすも一傍若無
 人に述べまば渚ハ涙を拂ひ源太左門横死是非なりとせ
 ども源之助も年十六才も成り得ば何卒家督相續頼ひ奉る源
 吾もついで悪黨ももう屋鋪も置く置はゆえは食客とかりの
 ほどの者ふりて何とぞ今一度將軍へ願下されりと願ふれ
 大膳大お怒りていつに女をればとて公の仰事と背く条きつら
 り源之助誠武士の魂りて早く屋鋪を立退雲の上海の

底までも敵を尋出し討てまは未練も家とのぞい奉る不届至
 極なりつて引立ると下知ると心ざれば下部も終に門外へ引
 出し割竹も追拂いなり源吾もあがり貞と舌もて左右の
 唇はちち大膳とりて一且下部もと呼出しつたり我此
 家の主らんばまありやふ仕へよ悪く仕へば首とるべき有にせん
 白眼廻しつて下部おとれ入針の筵も坐する思ひして男
 女も暮しつたかくて源之助親子の坐鋪より引立られし事
 られ一錢の貯ともつらび着のまは一里計夢の心地して去
 しが渚源之助も向い誠は作左門が言ひやくわへいんだ
 身を引立し出るが敵を討ち再び来る事もあらんか何成
 計とやるらん未練りて家督の事とて願ぬめりて



新編 黄泉抄 卷之二

敵討器量な事ばかりと満面は笑とすつるは身
 々より必はとげまゝ千辛万苦して親の仇を討と佐木の家を
 起し身一銭の貯りなればとすりの仇見非人とすり暮す
 しまはる人と交り人より仇を討とすり仇を討とすり心安う
 居しとすりの遠きは討と家の系圖とすり肌を離る源
 吾假令佐木の家と押領とすも此米物な時ハ將軍へ
 目見叶ふに穴賢人ふと努むとすり源之助完
 余と笑ひ母の用心と我心とすも符合せりの裁作左五門切腹せ
 しよりかみんと旭丸の叙の家指料と取替質りのと箱納約
 是まで持出いと答ふれば母も源之助が思慮の感に未
 叙を竹杖お仕込河内の春日は村てす所は非人小家と造りて保

助の日毎に街お出く物を乞ひ母は春の天満は神の殊に靈
 驗いらぶ守らせろ何卒敵の在家をさすといふと日毎
 小天満る宮居に詣け家

長柄長者の娘梅がえん兒に掛想とる活

爰に長柄長者と呼ぶと代の家富栄へ幾万の分限といふのと
 ちび姓ハ藤原濱氏あり名は左五門といふ世は濱の左五門を
 近国ふるびなき家子とめりたる女の子二人ありて姉と梅
 がえとよび妹を振木と稱してあ人も絶世は美人ありて紅梅を
 粧はざれども此世の人ともなりとゆくと身よを徒羅錦繡と
 すとい苗本の薫るゆり返るたけり姉ハ十六妹ハ十四才と成
 け親母の妹と産く身よりきき浪華の津村にあり環とて

後妻をいへ兄弟と月花と泳り暮しつゝ此環りと賤者
 の娘もつゝ器量よけまゝ長者の妻とさうりぬきど心づかう
 妬心多きれ長者もうとさうく思へども年老く追出さん
 面ふせく胸にほさうてうしと姉なる梅がえへ鶯はいとく
 愛して掌の名を唐琴と号する人も飼をういせ側をさ
 きど龜を出しぬまへ飛まらんもせざりけれびいと可愛がり
 て掌中の珠のどく飼をさうり梅がえを宿願ありとく父に
 糸がひ百日天満の天神へ詣けるされど日毎よ掌は駕の中へ
 く側をさうり後よと龜より出しぬまへ或る駕の屋根に
 の肩まごにさうりて載まされば奥あき事どとく日毎よ唐琴
 と具しつゝ或日空長閑よ糸遊ぶ日和ありければ唐琴をか
 より出し跡や先やと飛くさうり海いと面白く駕の中より泳め
 ろりきさうり一羽の鷹空より舞降りめ唐琴と目かけ羽を
 けり既よ掴んとさうりに姫さうりもめりやくとさうりも
 鷹の眼のれをさうりて拂ひ除るさうりさうり鶯ハ大おぼろき
 道の傍よ跪て居るん兒の袖へ飛入る鶯ハ猶も尻をい
 らし袖を目かけ飛来るん兒をやく身とさけ柄抄をりて
 丁し打ハ鷹をさうり打まら矢庭お地お落るん姫もも蘇
 生し心地してさや掌は姫君あり人奉りてよこ口に言を
 ん兒袖より掌は出し穢る手わく直よ駕へ移さんおぼれ
 ろりて抄の柄よ掌をとのせさうり出さる形をも面瘦垢付たれ
 其とさうり白をせいとさうり何某の中ねとつゝも恥しけれ

後妻をいへ兄弟と月花と泳り暮しつゝ此環りと賤者
 の娘もつゝ器量よけまゝ長者の妻とさうりぬきど心づかう
 妬心多きれ長者もうとさうく思へども年老く追出さん
 面ふせく胸にほさうてうしと姉なる梅がえへ鶯はいとく
 愛して掌の名を唐琴と号する人も飼をういせ側をさ
 きど龜を出しぬまへ飛まらんもせざりけれびいと可愛がり
 て掌中の珠のどく飼をさうり梅がえを宿願ありとく父に
 糸がひ百日天満の天神へ詣けるされど日毎よ掌は駕の中へ
 く側をさうり後よと龜より出しぬまへ或る駕の屋根に
 の肩まごにさうりて載まされば奥あき事どとく日毎よ唐琴
 と具しつゝ或日空長閑よ糸遊ぶ日和ありければ唐琴をか
 より出し跡や先やと飛くさうり海いと面白く駕の中より泳め
 ろりきさうり一羽の鷹空より舞降りめ唐琴と目かけ羽を
 けり既よ掴んとさうりに姫さうりもめりやくとさうりも
 鷹の眼のれをさうりて拂ひ除るさうりさうり鶯ハ大おぼろき
 道の傍よ跪て居るん兒の袖へ飛入る鶯ハ猶も尻をい
 らし袖を目かけ飛来るん兒をやく身とさけ柄抄をりて
 丁し打ハ鷹をさうり打まら矢庭お地お落るん姫もも蘇
 生し心地してさや掌は姫君あり人奉りてよこ口に言を
 ん兒袖より掌は出し穢る手わく直よ駕へ移さんおぼれ
 ろりて抄の柄よ掌をとのせさうり出さる形をも面瘦垢付たれ
 其とさうり白をせいとさうり何某の中ねとつゝも恥しけれ



源之助
賞の危難
と救い梅枝
姫と懸想
でしる

源之助

源之助

人品よりさきば姫と目くせむ打まりの汝よくも常の命を
救い何国に住りぬと尋ねば見ひし伏しを児の身に
侍に何国と宿と定む所も侍に人の袖ふりて物を乞
ひ一人の母と養へぬに侍と涙とを流しぬ姫の聞
よ胸ふり声と曇りてわく百日の願事つて天満神へ
詣り侍の門も此所よ来きぬのとせんくハ殊き唐琴が命
の親るれば娘どもよれに礼謝せよと余波やけハ駕の戸引よ
くハ娘ども白銀数多巾服小色ハ姫君ハ唐琴が命と助
けとせしと思しぬやまけける其方よ志しぬと河の
かきハ世おろりかと思ふぬ此白銀のこふは日毎ハ此所
来らば物とせんと言捨く皆ハ打連く急ぎを児ハ白銀を

頂き多くハ思ひぬけぬ事やむけの銀給ハ嬉ハこよ早
帰アて母よ見せぬ悦せんと立上りハかきも此鷹無
の殺生うつりの我ハ打ざりハ立見むハ鷹ハ性
根付ハやを児の拳をよるハ雲井遙ハ飛去アけハ姫を
かへりまじしちハ先の所へ帰ア其人のあハ後と打見やりハ
にやを児ハ見えハ佛のハ陽冬ハともよ立上りハ我が
唄ア多ども只いぬハ其人のこまハ見えてハ見えてハ
きかろうハ石引よせかくん
思へどもいぬハ夕暮ハ宿の堂ハ
是より意のやまハ不思義のあハ

佐々木親子松原作内は逢ふ話

かた事とまきくばを児の母渚へ来子の帰りの遅きとらふり
 春日江隈不出る詠ふ源之助いちく立帰り扱ふはまら
 の事つりく長柄長者の姫より多くの白銀はまらひゆ米其
 外潤へ参りくつとてさうさう有る自庖丁してつとりのほ
 いろまげふ母勸多まば渚へ見ふに涙とらと流しあま
 しや誰か人河内の国は郡司佐木源太左門が時世と
 言るがうまげらるる白米ちよれ肴と得く母へつとつとら
 しげ不見ゆこそかうくまききのふまでもお乳のふかづれ
 ぬる身の道は街不出く人の袂ふとがり一銭二銭とをひて命と
 つらぐ事さどや口惜く無念もあらうつらんまらひよ母は
 心の傍雲れくまでも尋移へよと思へばくや死んぬ日や死んぬ

と受度く懐劔よ手ハかけされも我もつらなりまらば力な
 く身もくづおまん死る事さうまら一日く送るをや今日
 そくぐくの白銀と得くれば此銀のららん限る母もかまは
 とも近國を巡りく敵の行形と尋多兎も角生て用るは我
 まらく源を左エ門のめがれ所へ参りくはとてよと泣くへ
 源之助ハ胸よりさくむらりさく心よまら事と宣ふの武進
 付仇と討くは悦の負むせ詳しと樂にいつくき月日と送は
 夢多くかやうのいまりははら持る仰お任せ此後ハ一
 夜の泊りハはゆくと受く播戸路とも尋り人夜もあけは
 休まらとて遠戸引立伏せり明も源之助と起出で流川
 ふ白波も折しも春日江隈ふの騒がしく助てよくと叫り

がう大の男に引づきまき来りぬらり二人の男一人の田舎人乃
財布を引出さんととらふはやとと手にとりて来りおどめり
源之助見兼く二人と押とらひり事とゆりまて流るる
二人の男大の眼をむき出し、いもごらと食のさといぬ我我の京
街道と働くりのり此男今市の流し船うき金子十兩をり
あつて見附此所までつけ来りかまふりまくれと源之助と引
のけ財布と引とらりうの男と踏付二人なくとづつて行んとするは
源之助其不仁の甚きは悪きて財布持する男と投つけ金を
田舎人小渡せば此人夢見し心地して悦み限り二人の賊大
お怒り已憎きと見人のがとと左右よりとら付と二人と堰のわ
らへて投やり一人と淀川の深へぶんぶと打込らふぞ生死の考ら

次浮つ沈んづ流ま行なれば隄の下より此体と見叶はとと思
ひけんこくと逃失り田舎人の悦み絶ぞ誠まはと見人の色
あま此金ばとらまごらり此内半か入用の事られ五兩は
礼とらとと上とらんと取出とら源之助押とら我足下と助ら
謝礼を受ん為らゆら途中の難事と見捨とらとらとら
世金給らら人事の我志無足ふらぬまゆらとと押せば
此人弥感とい中き身あまから弘き志恐入ぬとらと我志
も立ちと金ばおつと逃んととらばとらとらとらと金と
へ返さんと捨合わぞ小家のちより物騒とられば何事とらと立
出る渚が白田舎人つらとと見とらとらと不思議と正しく佐木
奥方と見えらとら余とのおとらへられば左もあれと奥方と



源之助
旅人の難儀と
助く不申も
作内ふり

作内

もやと尋ふ渚もけ人ととくと見てのまは松原作左五門が弟
作内とく武士は嫌い久しく加賀の国へ奉公奉行者なるを
汝は作内よわらばやと宣へば此人飛立ちり扱は奥方めはとも
御家の騷動兄が切腹とも風の便ふ兼て主人小暇をとりハ實
体ふ動しとて金子百兩餞別ふるり馳歸りいひいハ早内家
ハ源吾どの押領しあひは親子は行来りかたり多しと聞て
大ふかと落し北国の商人船の荷物世話は為し今ハ浪花の
片在所難波島と申所よ家と求免不自由と暮しけきの一服
部と申村へ干鯛の金子受取ふ参り歸り道とて盜賊ふ出會
難波の場へ立出我と助しと只かりとあのを見と存いひ一扱
ハ若旦那と申し申すは初少やとは列せしとて主従の

縁尺と急難と救ひあつた難有きと涙ながし物持きの源之
助も感心し扱ハ聞及し作内中々わらわらや兄作左五門遺言
ふ敵ハ加賀の者うれば汝はぶらぶら彼の国ハルべいと教へか
母の心あうと今まで尋ざりしが主従の縁尽せば此可あて
逢ふのうきとと渚りらも悦多し我も只今あてハ相意の
商人ふりやうと暮し一ハ西親子と引り由不自由なるに
は表はひし魚しいさくと二人の袖と引立きは源之助いつらく
過分なかくと見とあり親子暮やと深き所存ゆくと先日
もいふめか加賀の国ゆけ佐々木源左五門と申りの富樫の旗下は
わらわ汝魚能見おぼえつらんいふとせき立れば作内頭は
うれ成程佐々木源左五門と申入らけむり及びとも是を自玉

都の勤めうりへ終ふ見受しともわづらひけるも源之助も力と落したる加賀ふ親類ともわづらひ作内又曰親類へ遠きわづらひ兄弟もわづらひ人の長らくわづらひ母も傳へ何ま心を用ひてせむはとも有家と尋ふし作内も若もかきわづらひはるしと宣へ作内も今せんくわづらひ寂前の金ととり出し満が前ふおき此後折しゆきげん伺ひなむし此金ととり出さるる鬼と存け時ふえわづらひと存けいふまて相傳のわづらひ何とをわづらひ清下とわづらひと減ふ余まわづらひ言ふわづらひ諸も理ふ伏しきわづらひ此金替く借置べし若源之助敵を聞出し旅立せん時の用意金ふるさんわづらひわづらひ作内大ふよろこびなむわづらひ我も出供の心世とわづらひと悦い勇と又もわづらひいとく帰るわづらひ親も彼が真成

感し袖をぬきしを

佐々木源吾渚を盗死し系圖と奪ふ話

かして源之助の兵庫明石の方とたづねて思ひて母の飢うるのさうと日々心ほつたるゆゆしく白銀と得て米其外個置二三日の暇ありとつて母も傳へ勇とて随分心ほして尋ねかきわづらひ母と心よ掛りふまて堤まで見送るわづらひ源之助何と申ん心うからし又立戻して心あうる事のわづらひ重てのさうふつにわづらひ言ふわづらひ母と打笑ひ屋鋪と出しより一日も母のよと離れわづらひ左思ふも断さるる雪のうらまでも敵は尋人となり志あつたわづらひ本望の遂がわづらひ早急とわづらひ跡ふ心とわづらひ母の伺ふわづらひ見えらるる立出たり母も打志ほしわづらひ思ひて

一 小家の内へ入り此夜六ッ過の頃供人数多引連つらるし白絹しろきぬ
 五足臺ごあしだいに乗此非人いふじん小家へ案内あんないしれ諸しよの何事なにじやと小家と
 立出見たちだ見みきば源吾げんごたりこの恥ちやと小家の内へ進入しんじゆらんとさらは
 引ひくは婦人ふじん久ひさとしの對面たいめんやはゆるか浅間あさましは住居ぢゆうとも
 兼かく粗けのりりとも公こうの恐おそまあまま今日けふまでの音信おんじんも致いた
 さんびども未附寒みぞよらんも去さつち孫まごの肌寒かわさむおもおさんと此繪持このまゐり持も
 いたたたた何率なんりつ内受納うちうけな下くだされまと低頭ひだうして日頃ひごとも似にどうと
 かんきんよ述のくまば諸しよも會釈かいしゃくしては身みのまばと佐すけ木きのの家全いへぜん
 くつるるれが何なにには廉息れんじつと思おもふべき心こころよかけく消しょうゆひぬまぬま
 今いまつく非人いふじんとなりつまと身みふすくは新あらたらしけきぬまらど望のぞま
 信しんじは志しの程ほどの嬉うれしいには信しんじとえらすとくは家いえと大事だいじに

何国なんこくへ行いきしやんは親おや子この願ねがひを度たりつてもくまりし
 趣おもいはは身達みだちの頃退身のりひきのせの持退もぢひき之の系圖けいずの一卷いっけん旭丸あしたまるの
 叙志じゆしがく我われの貸かりの源之助げんすけとも一いつ緒しよの安未やすみよ養やしやひは不自由ふじゆう
 うれやらに貢こうせべ此この後の願ねがひの奉ほう上じやうしたらしといはならむぢり
 くまはくといはならむぢりは諸打笑しようちやういふといふ成るめどと思おもひし思おもひ
 かけぬ事ことと聞きくの我われ家の屋鋪やしきと出でる時の思おもひうげど上使かみの乘ま
 りまひし事こと也なり系圖けいず叙志じゆしの扱置さくぢ一錢いちせんの路用ろよう之の持もと夫つまゆえ
 かくえ見みといふりぬらり系圖けいず叙志じゆしを宝蔵たからぐらおもづく尋たづねの
 ちへと思おもひしぬらりちやん答こたへなれば源吾げんご大だいの眼まなことも門かどと見み
 ひらぬは汝なんぢ甘あまきらちらに二色にしきとも渡わたしま命斗いのちたうとも助すけ兵へい人ひとと思おもは

一にわが事の不敵さよ源を左門横死より兼て汝木が奪
 い置いとくき門より源之助此場ふゆぬ命真如る小冠者
 我汝出さぬとて出せせ置べきやと引とて捨伏懐中とて
 せ錦の帯ふ入一巻有り汝何とてわがやと引とて投除
 きの渚其手ふとがり付扱汝世ふ稀なる大悪人よとに我ホ
 め死を児ふ成るきと源左五門の情めう今まで憂目も逢
 ざりしとを児と有り下りわの源之助と不便も思はば此所
 よ来り系圖までと奪ひたる大悪人假令散らどくおる
 とも其系圖わとどきうといふ言づ付ばつと引とて寂前持来
 了一臺の白絹を引寄首ふ引とていとと帰とてわと叫びて
 手足をわくと猶も引志免息の根をとめりう入投のけ巻物と押

戴きう氏家の内よ叙やゆん小家打こぼら隈ぐまを見て
 のまども一物もつづがね扱源之助帯して行とてうん
 已十日のうちに打殺して旭丸を我物とせん獨言して立久
 らんとせ一人の家来よ何角叫き跡に残し其身へ灯燈て
 らう勢供人引連鳴野とて七馬とて此時源之助の西の宮
 まく来りて胸を死して先へ一寸も歩行さず
 扱と母の正身の上よ何事うんを一人ふり戻り頃初
 更も過ぬ頃ふどわが我家と見え踏つづ母の見
 めらびといふと灯燈打り見くあま咽は白絹とまとい倒れ
 きり仰天と助起せど早事切くわが懐中とてせよ系圖の
 巻物もわが何者の仕業どと狂気のどくわがこころは地

涙きへ出どごとと倒きく泣沉く時松の陰より何れも
 ちり刀拔き物ともいふと源之助と目かけ切返と引よめて
 技合せ志ど一戦い一が源之助も鍊よ二ツに成り死より何れも
 ろどとつらうと寄く見くわむ先年我仕い若黨之扱
 宵よ源吾来つ母とちりころ一系圖と奪いころ猶我をも殺
 さんと家来と残し置しめり人己源吾遠くへ行すと追付
 る母の仇を復せん狂人のどくありと馳行と暫待てとさむら
 りのちり是誰どとるん生駒の宝山比丘より源之助どら願
 首して尊者何ゆ此所おはい一敵とおひゆく何とぞえうや
 比丘ゆりくと立出汝母を殺され狼唄とる断る今源吾と
 追ひもるも多勢の中汝七面八臂のりもいふと敵とまきとに

源吾が運いもど心と静めりより事と弁せよ父の仇は
 先く母の敵と後せんこそ本意する人殊よ此所よ今日
 ろる水難ふ逢く魚腹お葬らるん汝が相大凶りて今や
 の姿わくろく必源吾が毒手お落入座し明日より所をか
 天満神を祈るべし必幸のり人其時辞とる事する受引べ
 かろく疑ふべし事とれと宣ふよ源之助とて位出
 一扱もく身ふと不幸の者はらじ父は周付おせよ見
 とぞ成り母渚も千年万苦して敵と尋らうち又母は
 叔父お殺さき其まじ一敵と付と叶と假令此身お母の
 幸はくも何せん所詮く不幸の我身いふと両親の敵とら
 得人今此所も生害し一念の悪鬼とるん敵とるん



源之助

宝山比丘

源之助

止行未

示母渚

源之助

宝山比丘

源之助

ふいと既よ刀ふるは掛くと比丘のくく押とめ汝血迷へるや
 此世の敵と死に討事のもえき家先達と家相ふり
 りし人か事と速置り今暫く公待の世ふ出人事
 疑ふ一汝が願をり天満神ふ増る事なり一翌日より百日乃
 願を起し日泰せし宣へば源之助漸死と止し重く言け
 ると母の喪中ふ神へ詣ん事をもり比丘打笑ひいで喪中
 のくろり人の穢る者こそ神も忌まひしや人重服乃
 家も至らんる神院をりやかかひ心よ掛る事なり
 悟しえ源之助も心と定め比丘の仰ふ順ひ叔母の死骸と泣く
 小家打崩しだびんころは比丘又押とめて先もいふぬ水難
 のたらしめを源太五門大井川より事起り横死ありけ母

も水難の相成果さむらん未来永くうぶ事あはへり我
 まるせよと破戸のくは渚が死骸はく載せ源之助もろも
 淀川へうろ免是水葬より未来成佛とみりしと田向し
 たす人の源之助をこし心もひりけ叔比丘といふて最前より
 此とらにねりしとど比丘吞へり我浪花は渚用りてこの
 所を通りかると女の叫ぶ声せり何事とやと松かげふよ
 つく同へば供人数十人召連る士の女はち殺とさほり
 子細りんとしに汝は連るぬ死をともえしり
 結ぶとぬを源之助両手は合せ比丘の情を謝し家も明日
 より向ひへ小家は移し修んと涙まぐり取斤付れ今月
 来月其形もりのりかると源吾ふ殺すべし能つ

終末音... 終末音... 終末音...
めよして比丘ひくハ就鳥尾山しゅうりういざんへ帰かへるまひたる

繪本黄鳥墳墓之二

神武天皇紀元二千五百四十八年

赤坂田所三日月田勇代

遠州

